

詩

奨励賞

兄

土居原町 神田 博行

「かんちゃん」の器は一番真ん中と

ときはき並べる五人の才女

銘々の個性溢れる真ん中は

はやくも底を突きにけるかな

壮齡の半身不随に奮ひ立ち

通ひ続けしすゑの尊し

思ひ立ち「リモート会」とふ電話受け

弟らはたちまちネットを開く

リモート会重ねて互いの武勇伝

予定の時は疾く過ぎにけり

立秋やリモート会は荒海の

佐渡によこたふ天の河なむ

趣味あればさ広き街の遠近も

シニアカーにて進み行くなり

炎天も兄シニアカーに散歩とや

重き病を二つも負ひて

シニアカー霜降る土手を散歩とふ

娘らは添ふ兄の至福に

梅が枝に鳥鳴く兄の水墨画

花咲く春を待つと見えしに

コロナ禍に訪問医療の施設あり

四六時中も介護するとう

緩和ケアにしばし安らぐ兄の顔

声が聞きたい言葉聴きたい

限りとて我を呼びたる兄に添ひ

次の息吹を息呑み待つ夜

寄り添ひし看護師の言葉有り難し

世の限りまで耳は聞こゆと

盛大にエールを部屋に流したり

ああ栄冠は君に輝く

除夜の鐘一つも聞かず兄逝きぬ

聞き澄ませども声さへ聞けず

日めくりの最後の一枚剥ぐ様に

大つごもりは兄を掠ひぬ

声殺し見上ぐる夜空雪もよひ

凍てつくばかりに吹き荒びけり

吹き荒ぶ雪もよひの夜明けぬると

聞けど心は開くるものかは

通夜葬儀一目はむと都から

車中泊して弟来て去りぬ

凍て空にISSを探りつつ

「星めぐりの歌」口ずさみたり

寒紅梅如何でか然まで咲き急ぐや

愛づる人こそ来ぬとも知らね

兄の死に歌を詠まんとする我や

憤ろしくも悔しかりけり

シニアカー見る度毎に思ひ出づ

我より忠実に歩きし兄を